

能力の潜在と技能の顕在

教科・領域教育専攻

生活・健康系コース（保健体育）

指導教員 綿引勝美

森藤孝文

0. 問題の所在

スポーツは、あらゆる事物が複雑に連関した事象の一側面として、われわれ人間の眼前に現象している。観察者の一人である指導者は、試合やトレーニングで、選手の動きをみる。経験のある指導者は、ウォーミングアップやトレーニングで選手の様子や表情をみるだけで、選手の調子を知ることができる。指導者は、何をみているのか？スポーツにおいて見えている物や見えていない物、見えているできごとや見えていないできごとがあり、我々の現前から立ち顕われては消え、消えては立ち顕われるということを常に繰り返している。そのなかで、選手は、トレーニングで技能や能力を獲得している。その獲得のプロセスで、指導者は、ある視座をもって現象をみている。本研究においては、このようなスポーツの現象やできごとを、スポーツ文化における「言葉」を手がかりにして考察する。考察は、以下の文献資料をもとに行う。

① Günter Schnabel, Sportliche Technik und Bewegungskoordination als Gegenstand und Arbeitsgebiet in der Theorie des Trainings (1976)

② Gunnar Drexel, Paradigmen in Sport und Sportwissenschaft (2002)

また引用・参考文献は本文の巻末に記載する。

I. スポーツの顕在性とスポーツ科学の潜在性

我々が実際に見ることのできるのは、オリンピックの100メートル走であれば、わずか10秒足らずの出来事ではない。スポーツの場面で顕在している選手のプレイの背景に、膨大な時間と労力がかけられていることは、想像に難くない。指導者、科学者をはじめとする、選手のプレイに関わるすべての潜在的な役割が十分に果たされてはじめて、より高度なパフォーマンスとして顕在化すると考えられる。その一役を担っているのが、スポーツ科学であり、スポーツ文化といえる。知の体系であるスポーツ科学が、選手のパフォーマンスやスポーツにどのように影響するのか、というのが問題になる。スポーツ科学の客観性が、いかにプレイの主体であるスポーツ選手に影響し、パフォーマンスとしてあらわれるのか。

スポーツにおける主観的あるいは客観的な術語の存在を前提にすることで、トレーニングや試合で顕在化する選手のパフォーマンスのみえかたは、違うのではないだろうか。指導者の主観を指し示す言葉は、科学の客観性を指し示す言葉とは区別する必要がある。

また、スポーツにおける術語は、スポーツ選手の実行や運動をどのように記述するかという問題がある。人間の運動は、常に変化しつづけ、また一回性の出来事である。それを記述しようとする、言葉は断絶し、時間の流れを静止させる。言葉は、運動を記述することができない。

しかし、言葉の差異や同一性あるいは言葉で記述できないことが、スポーツの見えている現象とみえない現象とを際立たせるきっかけになる。言葉を用いてテキストにする、指導者や選手が議論をしていくことで、言葉の潜在的な前提を顕在化させる。スポーツ選手の行為と言葉の関係性は、記述することで可能性が拓かれる。

例えば、実践という術語は、選手の行為やスポーツ活動などを対象化する概念装置になっている。実践という術語は、言葉として記述されることによって、論理上の一つ概念になる。そこでは、理論と実践という術語が、一般的に相対する概念として、同じ土俵に位置づけられる。理論と実践を同じ足場に位置づけることで、概念的なメタ領域を設定することができる。

II. スポーツとゲーム

スポーツにおける術語概念は、敵と味方、攻撃と守備、勝ちと負け…などの二項対立として、ゲームの土俵が確定される。スポーツとスポーツ科学における言語ゲームという術語分析を手がかりに、関係性を顕在化する方法である。これは、スポーツにおける術語のパラダイムを分析し記述することである。スポーツにおいて能力、技能、技術と概念定義はなされているが、それぞれが他の概念と関係性をもち、言語のゲーム性をもっている。

III. 能力の潜在と技能の顕在

スポーツとスポーツ科学のパラダイムを記述することは、スポーツとスポーツ科学の枠組みを明示し、スポーツの術語が構造化される。術語を構造化する際に、潜在性と顕在性は、指導者に対して視座を与えてくれる。

例えば、行為の主体であるA選手（固有名）の変化を記述するとする。その際にA選手を記述する言葉が必要になる。A選手の変化は、連

続的であり、今日と昨日の差異は、言葉の差異によって記述される。ただ差異が記述されるだけでは、個別の選手の変化を示すことができない。スポーツ科学は、選手の変化を追い続け、記述することでしか、選手の能力を顕在化することができず、また一般化され静止した言葉にはない、主体化された動的な言葉で記述する必要がある。

IV. スポーツ文化の創造

スポーツに関わる人は、言葉なくしてスポーツを語ることはできない。スポーツ科学の術語の体系は、複雑な網の目をもつスポーツ文化のフィルターである。スポーツ科学のフィルターを通して見る事で、境界線のない動的なスポーツの現象を構造化してみることができる。この構造は、選手の差異を変化として顕在化する。スポーツ文化の術語でさえ、試合の勝敗を決するゲームの道具である。ゲームの主導権を握るのは、どの国やどのチームなのか。その国のもつ言語は、それぞれのスポーツ文化に反映する。日本語のもつ優位性は、どこにあるのか。スポーツ文化の創造は、あらゆる力を方向付け、統合する情報戦略の鍵ではないだろうか。

V. 終章

スポーツの言葉は、選手をみるメルクマールになる。スポーツの言葉は、構造化されることにより、スポーツ文化の枠組みとして、スポーツのあらゆる要因を統合したポテンシャルになる。それは、能力や技能でさえ、言葉で記述され、科学によって議論されていることを考えると、能力や技能という言葉の背後にどれだけ多様な言葉をもっているかというのが、その国の文化のもつ成熟度を表すことになる。